

「在宅復帰」担って存在感

地域医療の最前線で4

現場！

がなした仕事をお金に換える要
ともいえる存在だ。なぜか女性
がとても多い。

私が「研修生の浜ちゃん」と
して過ごした社会医療法人関愛
会の大東よつば病院（大分市）。
師匠は、医療事務のベテラン、
鶴田真由美（49）だった。

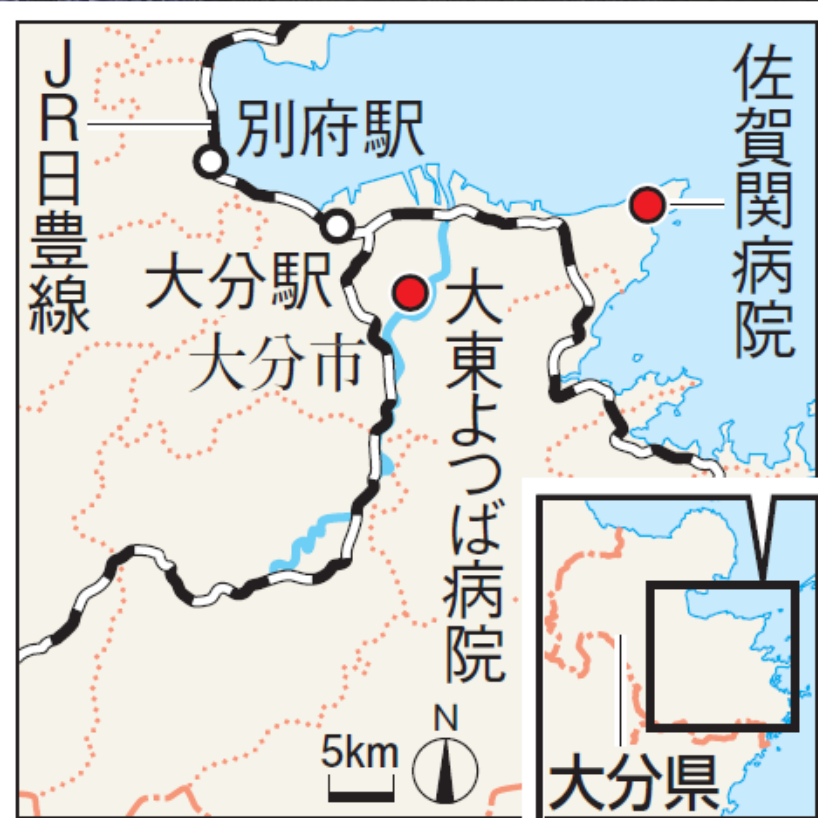
病院や診療所で健康保険証を
渡す。帰る時には自己負担分の
医療費を払う。その窓口の向こ
うにいるのが医療事務職だ。
診療、検査、投薬など、病院

医療費の計算は複雑だ。同じ
薬を使っても、入院中と退院す
る時の処方では扱いが違ふなど
細かいルールが無数にある。実
際のレセプト（診療報酬明細

書）を教材に、基本的な仕組み
や計算ミスを防ぐ方法を懇切丁
寧に教えてもらった。

おりしも電子カルテの導入前
で、紙カルテの手書きの記載を
コンピューターに入力する作業
を手伝い、診療報酬の流れを体
感。おかげで「医療事務能力検
定」の3級に合格できた。

昨年2月に開業したばかりの



「新しい病院」は、築27年の
老人保健施設の中に誕生した

大東よつば病院は、「コロナ危
機」から生まれた。2020年
3月、母体である関愛会が運営
する二つの病院で感染者が発
生。外来や入院を一時ストップ
した。コロナ以前から関愛会の
経営は厳しい局面にあった。18
年前に136人でスタートした
職員は約670人にまで増え、
拡大のスピードに収益が追いつ
かず19年に赤字に陥り、20年も
赤字は避けられなかった。

そんな難局打開の一手が、新
病院の開設だった。

人口が多い大分市中心部近く
にある老人保健施設のワンフロ
アを衣替え。人口減少地域に立
地する佐賀関病院や、事業を受
け継いだ診療所から計40床のベ
ッドを移した。

築27年の古い建物内に計画決
定からわずか9カ月で開院した
新病院。機能は絞り込んだ。大
きな病院で「病気は治ったが、
心身が衰えてしまった」患者
や、慢性的な病気で在宅療養中
に体調を崩してしまった患者に
対してリハビリやケアを施し、
「普通の在宅生活に戻れる」ま
でに回復させる。

主に高齢患者の「回復期」を
担う病院として、県内の基幹病
院や近隣の診療所、介護施設に
連携を呼びかけて回った。研修
生の私は、新病院紹介の広報誌

づくりを手伝った。

狙いは当たった。ベッドは満
床状態が続き、開院5カ月で単
月の黒字を達成したのだ。「社
会全体を見渡せばニーズがある
のは高齢者医療。病院の機能と
サービスがマッチした」と院長
の立川洋一（60）は話す。

医療事務は月初めに繁忙期を
迎える。毎月10日までに、病院
内で行われた医業を、国が決め
た「診療報酬点数」に換算して
集計し請求する。このデッドラ
インに間に合わない、入金が遅
れ職員への給料支払いなど資
金繰りに影響しかねない。

大東よつば病院の医療事務職
たちは、今年1月の締め切り
を、残業、休日・早朝出勤を続
けて何とか乗り切った。「1人
産休に入ったり新人の教育もあ
ったりで、今月はきつかったわ
あ」とチームを率いる鶴田はほ
っとした様子だ。

お世辞にもきれいとはいえな
い建物でも、業績が伸びていれ
ば、それは病院が地域で必要と
されている証左。職員たちの表
情も明るくなる。「来月もがんば
ろうね、浜ちゃん」。師匠・鶴田か
ら声をかけられ、そんなことを
思った。敬称略（浜田陽太郎）

ベテラン職員（上）に診療報酬請求の実務を
教えてもらう研修生の私。いずれも大分市

大東よつば病院は、入院患者を在
宅に戻すリハビリに力を入れる